

西の湖および伊庭内湖におけるホンモロコ稚魚の生息状況

大植伸之・岡本晴夫

1. 目的

西の湖および伊庭内湖では、ホンモロコ資源が回復傾向にあり、両内湖内で成育した稚魚が琵琶湖へ移動し、琵琶湖における漁獲にも貢献していることが分かっている。一方で釣り、タモすくい、投網などの遊漁が盛んになり、特に流入河川では、遊漁レベルを超える採捕が行われるようになった。これを受けて、平成29年から西の湖流入河川の1河川(山本川)、伊庭内湖流入河川の2河川(瓜生川、鉢光寺川)において、ホンモロコの産卵保護のため4月と5月の規制区間における水産生物の採捕が内水面漁場管理委員会の指示により禁止となった。

この委員会指示の効果を評価するために西の湖および伊庭内湖(大同川を含む)内のホンモロコ稚魚の生息状況を調査した。

2. 方法

調査は、平成30年5月15日から8月21日にかけて、それぞれ計8回行った。西の湖では6定点、伊庭内湖(大同川を含む)では9定点をそれぞれ設け、ビームトロール網(小型底引き網)によりホンモロコ稚魚を採集した。採集した標本は氷冷して持ち帰り、ホンモロコ稚魚数を計数した。各地点の生息密度(尾/㎡)を採集尾数(尾)/曳網面積(㎡)として算出し、それらの平均値を各内湖の稚魚生息密度の指標とした。曳網面積はビームトロール網の間口(m)×曳網距離(m)として算出した。

3. 結果

調査期間中の西の湖での平均生息密度(±標準偏差)は 0.52 ± 0.48 尾/㎡(5/15)から、 0.89 ± 0.53 尾/㎡(5/28)でピークを迎え、 0.02 ± 0.02 尾/㎡(8/20)と推移した。一方、伊庭内湖での平均生息密度(±標準偏差)は

0.17 ± 0.21 尾/㎡(5/16)から、 0.21 ± 0.37 尾/㎡(7/24)でピークを迎え 0.02 ± 0.01 尾/㎡(8/21)と推移した。

この生息密度を平成29年の同調査結果と比較すると、西の湖は同様に高い生息密度であったのに対し、伊庭内湖は平成29年に認められた高いピークは認められず、低調な結果となった。伊庭内湖流入河川である鉢光寺川で産卵基体となる水草が減少したことが一因となった可能性があるが原因は不明である。

採捕禁止となった平成29年には、前年までの同様の調査結果と比較して多くの稚魚が生息していることが示唆された。しかし、同様に採捕禁止となった平成30年の伊庭内湖では稚魚の生息密度は低い結果となった。ホンモロコ資源の増減には様々な事象が影響しているため、ホンモロコの資源管理のためにも今後の資源動向を把握し、委員会指示による効果を正しく評価していく必要がある。

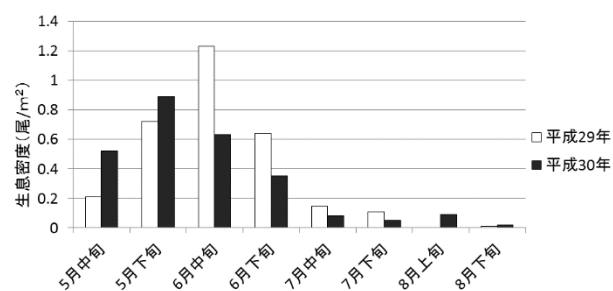


図1 西の湖6地点の平均生息密度(尾/㎡)

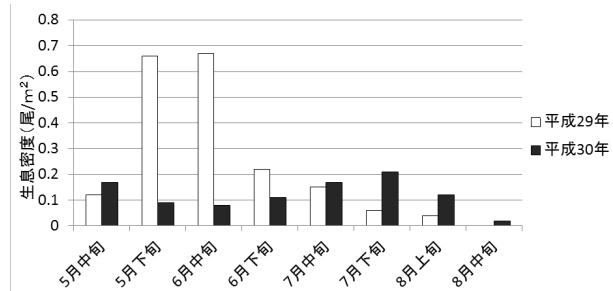


図2 伊庭内湖(大同川を含む)9地点の平均生息密度(尾/㎡)